

# 弥生時代の大阪と森小路遺跡



森小路遺跡は、今からおよそ2000年前、現在の河内平野に河内湖と呼ばれる大きな水域が広がっていたころ、これを臨む淀川の自然堤防上に営まれた遺跡です。遺跡は、1941年に発見されましたが、その後に行われた発掘調査で、弥生時代中期に栄えたムラの跡であることが明らかになりました。

現在、森小路遺跡のある新森地域は住宅地になっていますが、地面を少し掘り下げると、弥生時代の人々の生活の跡が目前に現れます。

## 弥生時代の森小路遺跡

弥生時代中期のムラの跡は、森小路遺跡の顕彰碑のある新森中央公園を中心に、半径約250mの範囲から見つか

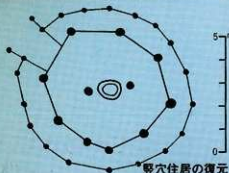
っています。遺跡の中心部分と考えられる新森4～5丁目付近では、住居の跡や食べかすを捨てたゴミ穴・貝塚など、当時の人々の生活の跡をはじめ、土器・石器・木器などの日常生活用品が出土しています。また、ムラはずれには、四角い溝を巡らせた方形周溝墓や丸い溝が巡る円形周溝墓などの弥生時代中期の墓がつくられていたようです。水田跡はまだよくわかりませんが、ムラの周辺部に広がる低湿地が水田の有力な候補地といえます。

弥生中期の土器





籾あと  
石庖丁



竪穴住居の復元

## 生 活

弥生時代は日本列島内で、稲作農耕が行われ、米を主食にした最初の時代でした。森小路遺跡でも、この地で稲作が行われたことを示す石庖丁（稲の穂を摘みとる石器）や木製の鎌・臼などの農具をはじめ、稲跡のみられる土器などが出土しています。また、弥生時代は戦争があった時代だと言われていますが、森小路遺跡でも、当時の武器とみられる石鏃や石槍をはじめ、戦いか祭りに使用したと思われる磨製の石戈も出土しています。

森小路遺跡から出土した石器のうち、打製石器（石鏃・石槍・石小刀）はサヌカイト、磨製石庖丁は黒色の高島石や緑色の結晶片岩、磨製石斧は和泉砂岩で作られています。これらの石器の石材は森小路遺跡から遠く離れた滋賀県（高島石）、和歌山県（結晶片岩）、大阪府と奈良県境の二上山（サヌカイト）などから当地に運ばれたものです。

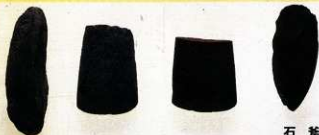
土器にも淀川対岸の北摂津地域、生駒西麓地域や和泉をはじめ、播磨・紀伊・近江地域などから運ばれたものがあります。

『魏志』倭人伝の一文に、「船に乗って南北に売買いをしにゆく」とありますが、森小路遺跡のムラ人達も近くのムラはもちろんのこと、遠く離れたムラとも活発な交易や交流を行っていたのでしょう。また、森小路遺跡のムラは、当時の近畿地方と大陸や朝鮮半島とを結ぶ際の主要なルート（瀬戸内海→河内海→淀川・大和川）に位置していますので、大陸文化の受け口としての役割をになっていたムラと思われます。

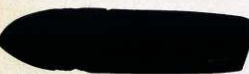


左図 小型石斧

木製容器

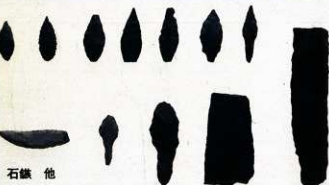


石 斧

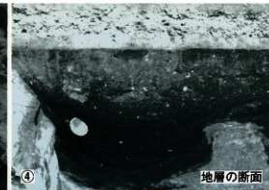


石 戈

右図 中国漢代の戈



石鏃 他



④

地層の断面

⑧

ムラの跡

②

⑩

貝塚と土器



③

方形周溝墓



⑦

ムラの跡



⑨

方形周溝墓出土土器



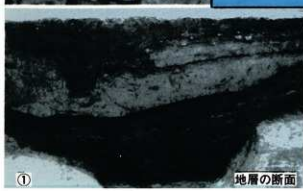
⑤

調査風景



⑥

調査風景



①

地層の断面



⑪

円形周溝墓



⑩

イノシシの骨



⑮

柱



⑬

ムラの跡

企画・編集：財団法人 大阪市文化財協会  
 発行：花しょうぶフェスティバル実行委員会  
 1992年6月(地区役所総務課)